

[論 文]

お絵かき遊び場面における幼児の交互交代行動

Turn-Taking Behavior of Preschool Children in Drawing Play Situation

藤 田 文

Fujita Aya

Abstract: The development of turn-taking rules in preschool children was investigated in drawing play situation. Participants were 22 pairs of four-year-old and 18 pairs of five-year-old children. They were requested to play a drawing for 10 minutes in pairs. In this situation, one pen was made available to each pair of children. Their activities were videotaped. Turn-taking behaviors were observed both in the four-year-old pairs and five-year-old pairs. A regulation by which the waiting child controlled turn-taking without monitoring the partner's behavior was observed in four-year-old children, more often than in five-year-old children, and this regulation was related to the number of conflicts that was observed. Moreover, this regulation was especially notable among boys. These findings suggested that four-year-old children are immature in taking the partner into consideration, which results in more conflicts, whereas five-year-old children are able to develop rules by monitoring their partner's behavior.

Key words : turn-taking behavior, peer relationships, preschool children, drawing play situation

キーワード：交互交代行動、仲間関係、幼児、お絵かき遊び場面

【問題と目的】

遊びの中で仲間との関係調整を行い協応的に集団活動を行える能力は、幼児の社会性の発達の一つの指標とみなされている (McLoyd, Thomas & Warren, 1984)。この関係調整がうまくいかない場合、つまり、いざこざが生じる原因は物の使用に関するものが最も多いことが示されている (Killen, 1989; 木下・朝生・斉藤, 1986; 山本, 1991)。従って、遊び場面において数少ない遊具をどのように使用するかということは、幼児が仲間との関係調整をしていく上で、重要な課題になると考えられる。

従来このような観点から遊び場面における物の使用の順序に関するルールがどのように発達するかが検討されてきた。その結果、小学生では自己と他者が交代で遊具を使用する

交代制ルールが自発的に産出されるが、幼児では交代制ルールの出現が未熟であることが示されている（阿南,1989；阿南・山内,1989）。これらの研究では、4歳児から小学3年生を対象に、子どもを二人組にしてビー玉遊びやおはじきや積み木を用いて自由に遊んでよい状況が設定された。二人の行動を分析した結果、小学生では「順番にしようね」「1回ずつしようね」と言語的に提案されており、明確な交代制ルールが産出されていた。一方、幼児ではそのような事前の言語的取り決めはほとんど観察されず、持続性のある交代制ルールが明確に出現しているとは言えなかった。そのつどそのものを誰が使用するのが決定され、結果的に自己と他者が交代でものを使用する状態が生じているのではないかと考えられる。したがって、幼児の場合は、持続性のある交代制ルールというよりは、そのつど決定される交互交代行動として、物の使用に関する行動を検討していく方が妥当だと考えられるようになった。

そこで、幼児の仲間関係において交互交代行動がどのように発達するのかを明らかにするために、様々な状況要因が検討されるようになった（藤田,1994；子安,1997）。これらの研究では、二人組の幼児のゲーム場面での行動が分析された。その結果、5歳児であればある程度安定的に交互交代行動が出現するが、4歳児はゲームの課題構造に影響されて交互交代行動の出現が不安定であることが明らかになった。

例えば、ゲームの課題構造そのものが交互交代行動を要求している状況では、4歳児であっても交互交代行動が安定的に出現した。「3目並べ」のゲームでは、物的資源は多くあるものの、二人が同時に駒を置いたり、順番を抜かしたりすれば根本的にゲームが成立しなくなる。したがって、そのような場合は4歳児でもほとんど安定的に交互交代行動が出現していた（子安,1997；子安・服部,1999）。また、「ボーリングゲーム」の少資源条件、つまり二人にボールが1個しかない条件では、4歳児でも交互交代行動が出現した（藤田,1994）。この場合、二人に1個しか遊具がないので交代しなければ二人で一緒に遊ぶことが困難になる課題構造であると考えられる。

一方、「黒ひげ危機一発ゲーム」では、5歳児では交互交代行動が出現したが、4歳児では交互交代行動がほとんど出現せず、二人が同時にランダムに実行していた（子安,1997）。このゲームは、タルに24カ所の穴があいており、そこに短剣を一本ずつ刺していき、タルにセットされた海賊人形を飛び出させるものだった。従って、このゲームでは、短剣が複数あり二人が同時に短剣を刺すことが可能な課題構造であった。また、「ボーリングゲーム」の多資源条件、つまり、二人に2個ボールが用意されている条件でも、5歳児では交互交代行動が出現したが、4歳児では二人が同時にボールを投げて交互交代行動はほとんど出現しなかった（藤田,1994）。

交代する遊具が多くある場合に4歳児のように同時に実行すると、自分がゲームを実行している間は他者の行為に注目することができない。つまり、4歳児は、自己と遊具の関係のみに焦点を当てており、ゲームの中で他者に注目しながら他者との関係調整をすることが未熟なのではないかと考えられる。

前述のボーリングゲームの少資源条件では4歳児でも交互交代行動が出現したが、ボーリングゲームの場合は一人がボールを投げ、もう一方の幼児がボールを取りに行き、次は自分が投げるといった交代だった。つまり、ボールが一旦幼児の手から放れるため、明確な

交代の意志や他者との関係調整が無くても交互交代行動を行いやすい課題構造であり、他者との関係調整をどのように行っているかは明らかにならなかった。この点を明らかにするために、藤田（2007）では、より明確な交代の意志や他者との関係調整がなければ交代できない、つまり使用する遊具が実行の際に幼児の手から放れない課題構造のゲームを設定して、4歳児と5歳児の違いを検討した。具体的には、魚釣りゲームを使用した。これは、ゲーム盤に8匹の魚が設置されており、それを竿で釣るゲームである。このゲームでは、交代しようとする時以外は釣り竿が手から放れることはない。従って、二人に竿が1本しかない場合には、その使用に関して他者との関係を調整しなければならない課題構造であると言える。

二人組の行動を分析した結果、4歳児でも5歳児でも全体的には魚を釣ったら交代という外的な規準のある交互交代行動が出現していた。しかし、交代の規準には年齢差も見られた。4歳児では5歳児に比べると、8匹全部釣ったら交代という規準が多く用いられていた。4歳児はゲームの中への他者の取り入れが未熟であり、やはり自分と遊具の関係のみに焦点を当てているので、自分がゲームをすべてやり終えて次に相手に交代するという規準を用いると考えられる。それに対して、5歳児の方が4歳児に比べ1匹釣ったら交代という明確な規準が多く、1つのゲームの中に他者の存在を取り入れてゲームを共有していると考えられる。また、交代のタイミングをはかって交代のきっかけを作る者を交互交代行動の主導者として分析した。その結果、4歳児も5歳児も全体的には交代を待っている待機者が主導者になることが多く、自分の順番を主張しながら関係調整を行っていることが示された。また、5歳女児のみゲームを行っている実行者の方が主導者になることが多く、自分から代わってあげようという自発的な他者への配慮を行っていることが示された。

この研究から、外的な規準が設定しやすい課題構造における交互交代行動の出現と関係調整の発達については示された。それでは、外的規準が不明確な課題構造では、幼児はどのように交互交代行動を行い、他者との関係調整を行うのだろうか、また年齢差や性差はみられるだろうか。この点を明らかにするために、本研究では、お絵かき遊び場面を設定する。お絵かき遊び場面は、絵を描いている幼児の行動の終了時点が明確でなく、1回分の行為の区切りを外的に判断することが難しい場面である。従って、交代の規準を幼児同志で決めていかなければならないと考えられる。従来、この規準が不明確な場面での交互交代行動については検討されてこなかった。従って本研究は、お絵かき遊びを用いて、規準が不明確な場面における幼児の交互交代行動の出現の年齢差と性差を明らかにすることを目的とする。

まず、交互交代行動の出現回数と交代に関するいざこざの出現を分析する。お絵かき遊び場面のような規準が不明確な場面では、他者をよく見て交代のタイミングをつかんで他者との関係調整をする能力が必要である。他者を見ることがこの時期に発達すると考えると、4歳児から5歳児にかけて交互交代行動が増加し、いざこざも減少するのではないかと予想される。次に、交互交代行動の主導者の観点から関係調整を分析する。お絵かき遊びは交代の際の規準が外的に明確に設定しにくいいため、従来の魚釣りゲームの分析のように交代の規準の側面から分類することが困難である。そこで、ペンを使用している実行者

と順番を待っている待機者のどちらが交代のきっかけを作り交互交代行動を主導するのかを分析して、関係調整の様相を明らかにする。

更に、そのような関係調整が時間経過と共にどのように変化していくのか、そのプロセスについて検討する。遊び開始時には関係調整がうまくいかないことがあっても、徐々に交互交代行動の主導者が交代のタイミングを設定して、時間経過とともにうまく関係調整ができるようになるのではないかと考えられる。

【方 法】

対象者：本研究の対象者は、幼稚園の4歳児44名（平均年齢4歳7か月）、5歳児36名（平均年齢5歳8か月）の計80名だった。性別内訳は、4歳男児28名（14ペア）と4歳女児16名（8ペア）、5歳男児18名（9ペア）と5歳女児18名（9ペア）だった。

遊具：遊びの状況に幼児が慣れやすくするために、本研究では、2種類の遊具を用いた。最初にゲームに動きがあり幼児の興味を引きやすい魚釣りゲームをしてもらい、次にお絵かき遊びをしてもらった。魚釣りゲームは、市販の「ブルブルカプッチョ釣りゲーム」(SEGA TOYS)だった。このゲームは、ゲーム盤に魚をセットし電源を入れると、魚の口が開閉するようになっていた。魚の口の中に釣り針を差し込み口が閉じた瞬間に釣り上げるゲームだった。釣り糸の部分がひも状で揺れるため、幼児にはやや難しい課題であると考えられた。従って、ゲーム購入時に10cmだった釣り糸を4cmに短く調節して釣りやすくした。魚は赤3匹、黄3匹、青2匹の計8匹だった。ゲーム盤の大きさは、縦34cm×横34cmだった。

お絵かき遊びは、市販の「スイスイお絵かき」(パイロットインキ株式会社)だった。ペンは、インクの代わりに水を使用したものである。ペンの中に水をいれ、このペンで付属のシートに絵を描いて遊ぶものである。絵を描いても、時間が経つと乾燥して自然に消えてしまう仕組みである。そのため、描き直したり、描き足したりできるようになっている。シートは、ピンク色で90cm×90cmの大きさの正方形だった (Fig. 1 参照)。

手続き：対象者を同性同年齢の二人組にした。同じクラスの幼児をランダムに組み合わせた。実験は幼稚園の大ホールで行われた。大ホールの隅に離して5台のテーブルを用意し、対象者5ペアに対して同時に実験を行った。小部屋で1ペアずつ実験を行うと対象者の緊張が高まる可能性があるため、大ホールで大勢一度に実験を行い、気楽な雰囲気作りを行った。各テーブルは距離的に離れており、背中向きとなるように設置されていたので、遊びに向かっている限りは他のペアの様子は見えなかった。一台のテーブルに、対象者二人を横に隣り合わせに座らせた。実験者1名が、対象者1ペアについて教示とビデオ撮影を行った。

まず、魚釣りゲームで遊んでもらった。テーブルの上に魚釣りのゲーム盤が置かれた。釣り竿は、二人に1本しか用意されていなかった。実験者は魚を釣ってみせながら、「これから、魚釣りゲームをしてもらいます。このように竿で魚を釣ります。魚を全部釣って



Fig. 1 お絵かき遊びのシートとペン

しまったら、魚をまた戻して遊んでいいです。」と、対象者に説明した。その後、「これから、私が終わりとと言うまで、二人で一緒に魚釣りゲームで遊んで下さい。それでは、始めて下さい。」と教示した。実験者がストップウォッチで時間を測定して10分後魚釣りゲームを終了した。

次に、お絵かき遊びで遊んでもらった。テーブルの上にお絵かき用のシートが置かれた。お絵かき用のペンは二人に1本しか用意されていなかった。実験者は、「これからお絵かき遊びをしてもらいます。私が終わりとと言うまで、二人で一緒に自由にお絵かきをして遊んで下さい。それでは始めて下さい。」と教示し。実験者がストップウォッチで時間を測定して10分経過後、お絵かき遊びを終了した。

ゲームの順番は、すべてのペアで魚釣りゲームのあとお絵かき遊びという順番だった。幼児に状況になじんでもらう必要があるために、最初に幼児の興味を引きやすく、取り組みやすい魚釣りゲームを行うことにした。従って、本研究のお絵かき遊びの結果は、魚釣りゲームの後に行ったものであると限定される。

遊びの途中で対象者から遊び方についての質問があった場合、実験者は「自由に遊んでいいです。」とだけ告げた。対象者には、10分間という遊び時間は明示しなかった。10分間の様子はビデオカメラで録画された。対象者の行動記録用として、ビデオカメラ5台（Video Hi8XR Handycam CCD-TRV95K SONY）、ビデオカメラ三脚5台（VCT-550RM）が使用された。ビデオカメラはテーブルの斜め前2 m程度の位置に三脚で設置された。

【結 果】

本研究では、お絵かき遊びで10分間ビデオ録画された対象者ペアの行動と発話を、交互交代行動を中心に取出して行動記録を作成した。以下の分析は、この行動記録をデータとして用いたものである。

（1）お絵かき遊び場面における交互交代行動の出現

お絵かき遊び場面における交互交代行動の出現を分析した。二人に1本しかないペンの使用に関する交互交代行動について分析した。ペンを持ってお絵かきをしている幼児を実行者、ペンを持たずに順番を待っている幼児を待機者とした。遊びの中で、実行者と待機者が入れ替わった場合を1交代とした。二人で同時にペンを持つ場合では、二人で持った時を1交代、どちらかがペンを放してまた一人になった時を1交代とした。ビデオ録画された対象者ペアの行動から、交代とみなされる行動をすべて取り出した。ビデオは、筆者と1名の大学生によって独立に分析された。交代の同定に関する2名の一致率は98.5%であり、不一致の場合は、ビデオを何度も見直し協議の上決定した。

このような交代が2回以上継続して観察されれば交互交代行動ありとしてペアを分類した。その年

Table 1 お絵かき場面の年齢・性別の交互交代行動の出現

	4 歳児		5 歳児	
	男児	女児	男児	女児
交互交代行動あり	12	7	9	9
交互交代行動なし	2	1	0	0

注：数値はペア数

年齢・性別の結果をTable 1 に示した。全く交互交代行動が出現しなかったペアは、4 歳男児 2 ペア、4 歳女児 1 ペアの合計 3 ペアだった。この 3 ペアでは、一人の幼児が10分間絵を描き続けていた。先行研究の魚釣りゲーム（藤田,2007）の場合と同様に、お絵かき遊びでも実行者が全く交代しようとしせず、待機者も自分の順番を主張することなく交互交代行動が全く成立しない場合があることが示された。しかし、そのペア数は全体的に少なかった。これらのペアでお絵かきが全くできなかった幼児に対しては、実験終了後に希望を聞いた上で、お絵かきをやってみたい場合には、一人で遊ばせるように配慮した。

さらに、交代回数を比較するために、交代回数が 0 回だったペアは分析から除き、各ペア10分間の交代回数を調べ、年齢・性別の結果をTable 2 に示した。各データの $\sqrt{x+.5}$ の変換値を求めて、2 年齢（4 歳児・5 歳児）× 2 性別

Table 2 年齢・性別の平均交代回数

4 歳児		5 歳児	
男児	女児	男児	女児
14.3 (7.1)	9.8 (5.5)	12.6 (5.1)	9.2 (6.4)

注：（ ）内の数値は標準偏差

（男児・女児）2 要因の分散分析を行った。その結果、有意差は見られなかった。お絵かき遊び場面では年齢や性別で交代回数に大きな違いがないことが示された。以上のことから、交代の規準が不明確なお絵かき遊び場面でも、幼児の大部分のペアで交互交代行動が出現していることが明らかになった。

（2）お絵かき遊び場面におけるいざこざの出現

お絵かき遊び場面では交代の規準を外的に設定しにくく、交代のタイミングがつかみにくいいため、他者との関係調整が難しいと考えられる。従って、いざこざが多く出現し、年齢差や性差も大きいのではないかと予想された。そこで、二人の間でいざこざが生じている場面をビデオから抽出して、年齢と性別で比較した。

ゲームの流れを止めてしまうような激しい遊具の取り合いは見られなかった。従ってここでは、遊具の取り合いに加え、実行者が遊びを行っている間に待機者がなんらかの行動を示して、実行者が不快感を表した場合もいざこざ場面として抽出した。例えば、実行者がまだ絵を描いている途中なのに、待機者がペンを取ろうとして生じるいざこざがあった。また、実行者が早く絵を描けるように手伝おうとして待機者が手を出す、実行者がそれを嫌がって生じるいざこざもあった。しかし、待機者が「貸して」と言語だけで適切に要求する場合はいざこざには含めなかった。ビデオは筆者と 1 名の大学生によって分析された。いざこざの同定に関する 2 名の一致率は85.1%であり、不一致の場合は、ビデオを何度も見直し協議の上決定した。

交代回数が 0 回だったペアは除き、各ペアの10分間のいざこざ回数を調べ、年齢・性別の平均いざこざ回数をTable 3 に示した。各データの $\sqrt{x+.5}$ の変換値を求めて、2 年齢（4 歳児・5 歳児）×

Table 3 年齢・性別の平均いざこざ回数

4 歳児		5 歳児	
男児	女児	男児	女児
3.9 (4.6)	4.8 (4.2)	5.0 (5.0)	3.1 (2.1)

注：（ ）内の数値は標準偏差

2 性別（男児・女児）の 2 要因の分散分析を行った。その結果、有意差は見られなかった。お絵かき遊び場面ではいざこざ回数に年齢差と性差はみられないことが示された。

（3）お絵かき遊び場面における交互交代行動の主導者の観点からの関係調整

お絵かき遊び場面では、幼児はどのように交互交代行動の関係調整を行っているのだろうか。お絵かき遊びは交代の際の規準が外的には不明確であるため、従来の魚釣りゲームの分析のように交代の規準の側面から交互交代行動を分類することが困難である。そこで、ペンの使用に関する交代のタイミングをどのようにはかって交代を主導しているのか、その主導者の観点から関係調整の分析を行った。

遊び開始の際に事前に、このような場合には交代するといった規準を言語的に取り決めているペアはなかった。幼児は遊びを行っていく中で、そのつど誰がペンを使用するのかを決定していたと考えられる。従って、すべての交代が出現した場面を個別の単位として、その直前の様子を分析対象とした。また、交代回数が 0 回であったペアはこの分析からは除外した。

ペンの使用に関するすべての交代場面を分析した結果、次のような 4 種類の関係調整に分類された。1 つ目は、ペンを持っている実行者が、自分が書き終わったところで自分から待機者にペンを渡す場合で、実行者主導調整とした。2 つ目は、実行者が描画途中だが順番を待っている待機者が自分の順番を言語的に要求して実行者が渡す場合で、言語的要求型待機者主導調整とした。3 つ目は、実行者が描画を終了したかどうかは判断できないが、待機者が描画している実行者の動きをよく見て、描いている手が止まった時を見計らってペンを取り上げる場合で、他者モニター型待機者主導調整とした。4 つ目は、待機者が実行者の描画中にも関わらずペンを取り上げる場合で、他者配慮なし型待機者主導調整とした。またこれ以外のものをその他として分類した。その他の中には、実行者が待機者にペンを渡すのと待機者が実行者の持っているペンを取るのがほぼ同時でどちらが主導か判断できない場合、実行者と待機者が一緒にペンを持って描く場合、また一緒に描いた後そのまま待機者がペンを持って取ってしまう場合などがあつた。

各関係調整タイプの年齢別・性別の平均出現割合を産出し、Table 4 に示した。Table 4 より、全体的に、実行者主導調整が多いことが示された。お絵かき遊び場面では、描画している子どもの方が書き終わったらペンを渡すという関係調整が多いことが明らかになった。Table 4 のデータに基づき、各関係調整タイプ別の各ペアでの平均出現割合を角変換し、2 年齢（4 歳児・5 歳児）× 2 性別（男児・女児）の 2 要因の分散分析を行った。その結果、実行者主導調整で、性別の主効果に有意な傾向が認められた ($F(1,33)=3.02, p<.10$)。つまり、男児の方が女児よりも実行者主導調整が多い傾向にあることが示された。また、他者配慮なし型待機者主導調整で年齢の主効果が有意だった ($F(1,33)=5.47, p<.05$)。つまり、4 歳児の方が 5 歳児よりも他者配慮なし型待機者主導調整が多いことが示された。

以上のことから、外的規準が不明確なお絵かき場面では、ペンを交代する場合に実行者主導調整が多く、実行者が自分の描画の終了という区切りをつけて交代するという関係調整が多いことが明らかになった。このことから、お絵かき遊び場面では、実行者の方があ

る程度のところで他者を配慮した調整ができることが示されたが、一方で待機者の方がどこで自分の順番を主張してよいかわかりにくいため待機者の主張が抑制されていることも示された。そして、このような関係調整が男児に多い傾向にあることも示された。

また、全体的には実行者主導調整が多いものの、待機者主導調整の3タイプでは年齢差が見られた。特に、他者配慮なし型待機者主導調整は、4歳児の方で5歳児よりも有意に多く見られた。4歳児ではまだ待機者が順番を主張するタイミングがわからず、他者配慮のない待機者主導調整もみられることが示された。それに対して5歳児では、他者配慮のない待機者主導調整は減少し、有意ではないものの他者の状況をモニターしたり、言語的に順番を主張したりして関係調整するように発達することが示された。

Table 4 年齢・性別の交互交代行動の主導者

	4歳児		5歳児	
	男児	女児	男児	女児
実行者主導調整	63.6(19.9)	46.4(23.4)	56.5(28.2)	43.9(21.2)
言語的要求型 待機者主導調整	6.6(7.1)	3.4(5.8)	3.9(3.9)	18.2(32.8)
他者モニター型 待機者主導調整	9.4(11.7)	27.9(25.2)	27.9(31.7)	30.1(17.6)
他者配慮なし型 待機者主導調整	19.5(17.4)	20.9(15.8)	10.7(9.9)	5.7(6.3)
その他	0.9(2.2)	1.3(3.4)	1.0(3.0)	2.1(3.3)

注1：数値は各関係調整タイプの1ペアあたりの平均出現割合 注2：()内は標準偏差

(4) お絵かき遊び場面における関係調整といざごとの関連

結果(3)の分類によるお絵かき遊び場面の関係調整タイプによって、いざごとの出現に違いがあるのかどうかを検討した。Table 4の関係調整タイプそれぞれについて、年齢及び性別の4群ごとで、ペアのタイプの出現割合の中央値を求め、それを規準に各タイプの出現割合が高い半数のペアをそのタイプ高群、低い半数のペアをそのタイプ低群として分類した。奇数ペアの4歳女児、5歳男児、5歳児女児では中央値のペアについては数値が近い方の群に分類した。

年齢別・性別・関係調整タイプ別の結果(2)で求めたいざごとの平均出現回数をTable 5に示した。各データについて開平変換($\sqrt{x+.5}$)を行い、関係調整タイプごとに2年齢(4歳児・5歳児)×2性別(男児・女児)×2関係調整タイプ群(高群・低群)の3要因の分散分析を行った。その結果、他者配慮なし型待機者主導調整における関係調整タイプ群の主効果に有意差が見られた($F(1,29)=8.79, p<.01$)。このことから、他者配慮なし型待機者主導調整の関係調整が多いペアは、少ないペアよりもいざごど回数が

多いことが示された。また、性別と関係調整タイプ群の交互作用に有意な傾向が見られた ($F(1,29)=3.25, p<.10$)。このことから、女兒は関係調整タイプによるいざこざ回数の違いがそれほど大きくなく5歳女兒ではむしろ低群の方でいざこざが多いが、男児の方が他者配慮なし型待機者主導の関係調整が多いペアが少ないペアよりもいざこざ回数が多いという違いが大きい傾向にあることが示された。5歳女兒では、他者配慮なし型待機者主導調整高群といっても、他の年齢に比べるとこの調整のタイプは全体的に割合が非常に低かったため、いざこざ回数との関連が見られなかったと考えられる。また、他の関係調整タイプ別の分析に関しては、有意差は見られなかった。

以上のことから、関係調整のタイプといざこざの出現には部分的に関連があり、他者の行動をよく見ておらず、実行者がまだ描いているにも関わらず待機者がペンを取り上げる他者配慮のない待機者主導の関係調整が多いといざこざが増加することが明らかになった。

Table 5 年齢・性別・関係調整タイプ別の平均いざこざ回数

	4 歳児		5 歳児	
	男児	女児	男児	女児
他者配慮なし型待機者主導調整高群	6.7(5.8)	8.3(5.0)	8.8(5.7)	2.4(0.6)
他者配慮なし型待機者主導調整低群	2.3(2.7)	3.5(1.3)	2.0(0.7)	4.0(3.2)

注：（ ）内は標準偏差

(5) お絵かき遊び場面における関係調整のプロセス：ケースの分析

ここでは、お絵かき遊び場面における関係調整のプロセスを詳細に検討するために、いざこざが生じた回数が少ないペアと多いペアを例にとり、二人のやりとりの様子をケースとして分析していく。

① ケース1 4歳男児（いざこざが少ないペア）

4歳男児のいざこざが少ないケース1では、A男の方が最初に描き始めるが描き終わったところで、すぐに自分からB男にペンを渡した。その後、B男も自分が描き終わったら、自分からA男にペンを渡すという実行者主導であった。この後も、この実行者主導調整で交互交代行動が進行していき、相手が絵を描いている間に待機者から手を出すようなことは一度もなかった。

② ケース2 4歳女児（いざこざが少ないペア）

4歳女児のいざこざが少ないケースでは、C子が最初に描き始めるが、D子がC子の手が止まったところを見計らって手を出している。それに対してC子は抵抗せずに、うまく交代している。更に、D子は自分が描き終わると自分からペンを渡した。次には「貸して」と言語的に要求して交代した。このように、他者配慮モニター型待機者主導調整と実行者主導調整と言語的要求型待機者主導調整など関係調整のあり方を模索しながら、交代

を行っており、全体的にいざこざは少なかった。

5歳児のいざこざが少ないペアに関しても、これらのペアと同様に他者モニター型が多く、他者の動きをよく見ることで、うまく交互交代行動が継続されていた。

③ ケース3 4歳男児（いざこざが多いペア）

4歳男児のいざこざが多いケース3をTable 6に示した。このケースでは、I男が最初に描き始める。最初の方は、二人とも描くものが決まっていなかったのか、少し描いて自分からペンを渡す実行者主導調整で交互交代行動が行われていた。しかし、途中から相手が描いている途中でも手を何度も出して、いざこざが頻繁に生じるようになった。他者配慮なし型待機者主導調整が徐々に増加し、無理やりペンを取り上げて交代するようになった。

その後I男が「怪獣を描く」と言って、ずっと描き続けていた。描くものが決まったせいか、I男はJ男が手を出しても全く変わろうとしなかった。そのため、いざこざが再び何度も生じるようになった。最後には、J男が無理やりペンを取り上げ他者配慮無し型待機者主導調整の交代が行われた。このように、徐々にずっと描いていたいという欲求が高まっている様子で、時間経過とともにいざこざが増加していた。

④ ケース4 4歳児女児（いざこざが多いペア）

4歳女児のいざこざが多いケース4をTable 7に示した。このケースでは、最初から他者配慮なし型待機者主導調整の交代が見られ、L子の方が相手の状況に関わらず手を出してペンを取ろうとしていた。そのため、K子は抵抗していざこざが生じることが多かった。途中では、K子によって他者モニター型待機者主導調整や実行者主導調整もみられ、交互交代行動は継続して実行されていたが、最後の方でも、L子は他者配慮なし型待機者主導調整を行い、全体的にいざこざが多く生じていた。

5歳児のいざこざが多いペアでも、同様に最初の方では実行者主導でうまく交互交代行動が行われていても、途中から他者配慮なし型待機者主導が増加し、いざこざが増えてくるケースが見られた。

以上をまとめると、いざこざが少ないペアは、実行者主導調整が多く、4歳男児でも他者を配慮して実行者の方からペンを渡すという交互交代行動を行っていた。また、待機者主導調整の場合は他者モニター型が多く、相手の描いている様子をよく見て、手が止まったところを見計らってペンを取ろうとするとうまく交代できいざこざが少なくなることも示された。

一方で、いざこざが多いペアでは、他者配慮なし型待機者主導調整が多いことが読み取れる。相手が描いている途中でペンを取り上げようとすれば、当然実行者は不満であり、いざこざが生じることになる。お絵かき遊び場面では、行動の区切りが外的には不明確であるため、子どもが交代の規準設定をするのが難しく、交代のタイミングがつかみにくい。そのため、このようなタイプのいざこざが生じるようである。

また、特にこのような他者配慮なし型は、時間経過とともに増加している様子も示された。最初は実行者主導調整でうまく交代していても、自分が描きたいものが決まり、描き続けたい欲求が高まったり、一方の幼児が他者配慮なし型で交代すると、他方の幼児も同様に他者配慮なし型の関係調整をするようになったりして、最後の方にいざこざが増加しているようである。時間経過とともに交互交代行動の規準が明確になるのではないかと予

Table 6 ケース3 4歳男児(いざこざが多いペア)

ゲーム開始、I男がペンを取り描き始めた。
交代① 実行者主導調整
I男…チョンと点を描き終わると、I男の方からJ男にペンを渡した。
交代② 実行者主導調整
J男…ペンをもらって描き始めるが、チョンと点を描き終わると、J男の方からI男にペンを渡した。
I男…ペンをもらって描き始めた。
J男…I男が描いている途中で、ペンを取ろうとした。
I男…J男にペンを取られそうになるので「待って」と言ってJ男の手を払いのけて抵抗。いざこざが生じた。
結局I男がペンを放さずにいた。
もう一度同じいざこざが生じた
交代③ 実行者主導調整
I男…描き終わると、I男の方からJ男にペンを渡した。
J男…I男からペンをもらい描き始めた。
I男…J男が描いている途中で、ペンを取ろうとした。
J男…I男にペンを取られそうになるが、気にせず絵を描き続けた。いざこざが生じた。
……中略……
交代⑪ 待機者主導調整(他者配慮なし型)
J男…I男が描いている途中でペンを取り上げた。
交代⑫ 実行者主導調整
J男…描き終わって、自分からI男にペンを渡した。
……中略……
I男…J男からペンを受け取り、円を描き続けて、「怪獣描こう」と言いながらずっとペンを持ち続ける。
交代⑰ 待機者主導調整(他者配慮なし型)
J男…I男がずっとペンを持ち続けているので、何度も手を出してペンを取ろうとする。それでもI男は渡さないため、何度もいざこざが生じた。

Table 7 ケース4 4歳女児(いざこざが多いペア)

ゲーム開始、K子がペンを取り女の子を描き始めた。
L子…K子が描いている手が止まったところで、手を出してペンを取り上げようとした。
K子…いやがって「待って、待って」と言って、さえぎった。ペンをわたさずいざこざが生じた。
交代① 待機者主導調整(他者配慮なし型)
L子…K子が描いている途中でペンを取り上げた。
交代② 待機者主導調整(他者モニター型)
K子…L子の描いている手が少し止まったところでペンを取り上げた。
L子…まだ描きたい様子ですぐにK子のペンを取り上げようとするが、K子は「待ってよ」「いいじゃん」と言って渡さなかった。いざこざが生じた。
交代③ 実行者主導調整
K子…「できた」と言って描き終わると、K子の方からL子にペンを渡した。
……中略……
K子…「何描こうか?」とL子に話しかけながら描こうとしていた。
L子…答えずに、手をだしてペンを取ろうとした。
K子…抵抗して拒否した。いざこざが生じた
交代⑫ 待機者主導(他者配慮なし型)
L子…K子が描いている途中でペンを取り上げた
K子…「Lちゃん悪いよ」と言うが取り上げられた。

注：□は、交代の回数と関係調整のタイプ

想されたが、結果は逆で、行動の区切りが外的に不明確であるお絵かき遊び場面では、時間経過とともに他者を配慮した関係調整ができなくなり、交互交代行動が不安定になることが示された。

【考 察】

本研究の目的は、お絵かき遊び場面における幼児の交互交代行動の出現とその主導者の観点から他者との関係調整の発達を明らかにすることであった。

外的に規準を設定することが難しいお絵かき遊び場面の方が交互交代行動の出現が少なく、いざこざの出現に年齢差や性差が多く見られるのではないかと予想された。しかし、予想とは異なり、交代の規準が不明確なお絵かき遊び場面でも、大部分のペアで交互交代行動が出現していた。また、いざこざ回数も特に多いという傾向はなく、年齢差や性差も見られなかった。幼児では交互交代行動の外的規準が不明確な課題構造になった場合にも、交互交代行動が安定的に出現していることが明らかになった。さらに関係調整の分析では、従来の研究で魚釣りゲーム場面では待機者主導調整が多いことが示されていた(藤田,2007)が、お絵かき遊び場面では、実行者主導調整が多く、実行者が自分の描画の終了という区切りをつけて交代するという関係調整が多いことが明らかになった。外的に交代の規準を設定することが難しいお絵かき遊び場面では、実行者の方がある程度のところで他者を配慮した調整ができることが示された。しかし、お絵かき遊び場面というのは、実行者が絵を描き終わったということを待機者は目で見て判断しにくいことから、待機者から主導することができず、実行者主導交代となったとも考えられる。いずれにしても、4歳児であっても課題構造に合わせて、交代の規準が不明確な課題構造であっても交互交代行動を行えることが示された。

また、待機者主導調整のタイプでは年齢差が見られた。特に、他者配慮なし型待機者主導調整は、4歳児の方で5歳児よりも有意に多く見られた。4歳児では、まだ待機者が順番を主張するタイミングがわからず、他者配慮のない待機者主導調整もみられることが示された。他者配慮なし型待機者主導調整のタイプが多いペアはいざこざが多いことも示されており、4歳児は他者の行動をよく見ていないために、関係調整が未熟であることが示唆される。それに対して5歳児では、他者配慮なし型待機者主導調整は減少し、他者の状況をモニターしたり、言語的に順番を主張したりして関係調整していた。他者の行動をよく見て、絵を描く手が止まったところを見計らって交代を要求していく能力、つまり他者の行動に注目する力の発達が関係調整に重要であることが示唆される。

さらに、遊びのプロセスを詳細に検討すると、最初のうちは実行主導調整によってうまく関係調整が行われていたが、後半でいざこざが増加する傾向が認められた。時間経過とともに、待機者の早く描きたいという欲求と実行者のもっと描いていたいという欲求のぶつかり合いが始まり、相手が描いている途中でも関係なく手を出してペンを取り上げる他者配慮のない関係調整に変化するペアも見られた。つまり、幼児の関係調整は時間経過とともに規準が明確になり安定していくというわけでは必ずしもないことが示された。幼児の関係調整の時間経過にともなうプロセスについては、今後さらに検討していく必要があるだろう。

魚釣りゲーム場面では、5歳女児のみで実行者主導調整が多く見られ、女児の方が他者配慮が多いことが示されており（藤田,2007）、女児の抑制能力の高さ（柏木,1988）を支持する結果が得られていた。しかし、本研究のお絵かき遊び場面では5歳女児を特徴づけるような明確な性差は見いだされなかった。課題構造によって性差の現れ方も異なることが示されたと言えよう。交互交代行動に関する性差がどのような部分で生じるのかについても今後さらに調べる必要がある。

本研究で外的に規準が不明確なお絵かき遊び場面を設定して、詳細なケース分析を行うことで、最初から他者配慮なし型待機者主導調整の関係調整を行う幼児が数名いることが明らかになった。この幼児たちは、明らかに他者の行動を見て関係調整をしていく側面が未熟であるといえる。このような交互交代行動の出現場面を設定することで、幼児の未熟な関係調整が明確になると考えられる。未熟な幼児に相手の幼児も影響を受けて徐々に二人とも他者配慮のない関係調整をするようになるケースも見られた。保育場面に交互交代行動を必要とするような遊びを取り入れていくことで、関係調整の未熟な子どものスクリーニングにつながる可能性も示唆される。また、関係調整の未熟な幼児に対して、交互交代行動を安定的に行えるように介入していくことも必要になってくるだろう。

【引用文献】

- 阿南 文. (1989). 遊び場面における子どものルール共有過程. *教育心理学研究*, 37, 218-224.
- 阿南 文・山内光哉. (1989). 幼児の遊びにおけるルール共有過程の分析. *九州大学教育学部紀要教育心理学部門*, 34, 91-100.
- 藤田 文. (1994). 幼児のゲームルールに及ぼす物的資源量の影響. *山内光哉教授退官記念論文集*, 145 - 151.
- 藤田 文. (2007). 魚釣りゲーム場面における幼児の交互交代行動：交互交代の規準と主導者に着目して. *発達心理学研究*, 18, 3, 227-235.
- 柏木恵子. (1988). 幼児期における「自己」の発達. 東京：東京大学出版会.
- Killen, M. (1989). Context, conflict, and coordination in social development. L. T. Winegar (Ed.), In *Social interaction and the development of children's understanding*. New Jersey : Ablex Publishing Corporation, 119-146.
- 木下芳子・朝生あけみ・斎藤こずゑ. (1986). 幼児期の仲間同士の相互交渉と社会的能力の発達—三歳児におけるいざこざの発生と解決—. *埼玉大学紀要教育学部（教育科学）*, 35, 1-15.
- 子安増生. (1997). 子どもが心を理解するとき. 東京：金子書房.
- 子安増生・服部敬子. (1999). 幼児の交互交代と「心の理論」の発達. *京都大学大学院教育学研究科紀要*第45号, 京都大学, 京都, 1-16.
- McLoyd, V. C., Thomas, E. A. C., & Warren, D. (1984). The short-term dynamics of social organization in preschool triads. *Child Development*, 55, 1051-1070.
- 山本登志哉. (1991). 幼児期における『占有の尊重』原則の形成とその機能—所有の固体

発生をめぐって－. *教育心理学研究*, 39, 122-132.

【付 記】

本論文を執筆するにあたり、広島大学教育学部青木多寿子教授、森敏明教授、杉村伸一郎教授にお忙しい中大変多くのご指導をいただきました。心より感謝申し上げます。

また、研究実施にご協力くださった幼稚園の先生方や園児の皆様、大分県立芸術文化短期大学卒業生近藤絵里香さんと山田宏美さんのおかげで論文を作成することができました。ここに記して感謝致します。

本研究は、科学研究費平成23年～25年度基盤研究C課題番号23530885「子どもの仲間関係における交代制ルールの共有過程」の補助を受けました。